

紹介患者さん診療・検査事前予約ご利用のご案内

医療機関用 外来診療・検査事前予約 FAX予約

待ち時間を短く患者さんが円滑に診療・検査を受けられるように、病院及び診療所の先生から『事前予約』をお受けしております。

●予約方法

①「紹介患者さん事前予約申込FAX用紙」に必要事項を記入し、地域連携室までFAXで送信してください。



②直ちに、予約をお取りし、「予約受付票」をFAXで送信します。ただし、受付時間外のFAXについては、翌営業日の朝にご連絡いたします。



③患者さんに以下をお渡しください。

- ・予約受付票
- ・診療情報提供書(紹介状)
- ・フィルム等



④ご来院時、患者さんには以下をお持ちいただきます。

- 先生から受取ったもの
 - ・予約受付票
 - ・診療情報提供書(紹介状)
 - ・フィルム等
- 別に必要なもの
 - ・健康保険証
 - ・お薬手帳又はお薬のわかるもの
 - ・診察券



..... 予約受付先

●京都市立病院地域連携室

TEL (075)311-5311(代) (内線2113)

FAX **(075)311-9862(専用)**

●事前予約医療機関専用電話

(075)311-6348

事前予約受付時間(土日祝日を除く)

平 日/8:30~19:00(木曜日は17:00まで)

FAXは、24時間お受けしています。

地域連携相談業務

平 日/8:30~17:00(月曜日~金曜日)

患者さん用 紹介患者さん事前予約センター 電話予約

先生からの紹介状があれば、患者さんからのお電話で、ご自身のスケジュールに合わせた予約をお取りいただくことができます。

※担当医師の指定、検査の予約はできません。

●予約方法

①お電話をされる前に、患者さんには以下をお手元にご用意いただきます。

- ・事前予約申込票(必要事項記入済みのもの)
- ・診療情報提供書(紹介状)
- ・診察券 ※初診でもご予約可能です。



②患者さんから『事前予約センター』へお電話いただきます。

専用電話番号 **(075)311-6361**



受付時間/月~金(9:00~17:00)

※土・日・祝・年末年始(12/29~1/3)を除く

●ご予約は前日17:00まで受付しております。

▶電話予約時に確認させていただく内容

- ・患者さんのお名前(漢字・ヨミガナ)
- ・生年月日・性別
- ・ご連絡先(電話番号等)
- ・紹介元医療機関名・予約診療科



③ご来院時、患者さんには以下をお持ちいただきます。

- 先生から受け取ったもの
 - ・事前予約受付票(必要事項記入済みのもの)
 - ・診療情報提供書(紹介状)
 - ・フィルム等
- 別に必要なもの
 - ・健康保険証
 - ・お薬手帳又はお薬のわかるもの
 - ・診察券

健康診断や人間ドック、各種検診で「要精密検査」となった場合でも、上記と同様の手続きで事前予約が可能です(初診でも予約可)。ぜひご利用ください。

※ただし、市立病院で人間ドックを受けられた場合は、健診センターでの予約となります。

専用の申込用紙は、京都市立病院のホームページからダウンロードが可能ですので、ぜひご利用ください。



地方独立行政法人 京都市立病院機構

京 都 市 立 病 院

地 域 連 携 室

〒604-8845 京都市中京区壬生東高田町1-2

TEL 075-311-5311(内線2113) FAX 075-311-9862

事前予約医療機関専用電話(地域連携室直通) 075-311-6348

<https://www.kch-org.jp/>

京都市立病院

連携だより

vol.49
令和5年7月

● 新任部長ご挨拶

京都市立病院機構理念

京都市立病院機構は

- 市民のいのちと健康を守ります
- 患者中心の最適な医療を提供します
- 地域と一体となって健康長寿のまちづくりに貢献します

京都市立病院憲章

- 1 質の高い安全な医療を提供するとともに、地域の医療水準の向上に貢献します。
- 2 患者の権利と尊厳を尊重し、心のこもった医療を提供します。
- 3 救急や災害時における地域に必要な医療を提供するとともに、地域住民の健康の維持・増進に貢献します。
- 4 病院運営に参画する事業者等とのパートナーシップを強め、健全な病院経営に努めます。
- 5 職員の育成に努め、職員が自信と誇りを持ち、全力で医療に従事できる職場環境を作ります。

総合外科部長 秦 浩一郎



令和5年4月より、総合外科(消化器外科・小児外科)部長として着任致しました。

私は1995年に大阪医科大学を卒業後、京都大学外科学教室に入局、5年間の一般・消化器外科修練の後に大学院(2000～04)、ドイツ留学(2005～07)を経て、2008年より京都大学 肝胆膵・移植外科に帰学、以来 助教→病院講師→准教授として15年以上に渡り多数の高難度肝胆膵外科手術、肝移植手術に従事して参りました。培ってきた技術/知識/経験を京都市民の皆様へ還元して参ります。

古く“小医は病を医し 中医は人を医し 大医は国を医す”

と申します。医学的に最適な外科治療の提供を常としながら(病を医す)、個々の患者さん・御家族の御希望に寄添える全人的医療を、かかりつけ医の先生方、当院各科との連携により実現すべく(人を医す)、当院外科チーム一丸となって外科診療に当たって参ります。“国を医す”までは困難かも知れませんが、京都市の外科診療の充実と発展に貢献できるように微力ながら精進して参ります。

引き続き 御指導と御支援の程、宜しくお願い申し上げます。

資格 日本外科学会 認定医/専門医/指導医、日本消化器外科学会 専門医/消化器がん外科治療認定医/指導医、日本肝胆膵外科学会 高度技能専門医、日本肝臓学会 肝臓専門医、日本がん治療認定医機構 がん治療認定医、Da Vinci(手術支援ロボット)認定術者、麻酔科標榜医、自立支援医療指定医(育成医療/更生医療)、難病指定医 等

役職 国内：日本肝胆膵外科学会 評議員、日本肝移植学会 幹事/学術教育委員/国際委員、日本移植学会 代議員/トランスレーショナルリサーチ委員、日本臓器保存生物医学会 評議員/臓器保存機能再生委員/臓器ホストレスポンス研究プロジェクト委員、日本血液型不適合移植研究会 幹事、近畿外科学会 評議員
国際：欧州外科研究学会(ESSR) 日本代表世話人、日独肝臓外科研究会(JGSSLS) 幹事 等

呼吸器内科部長 小熊 毅



4月1日より江村正仁先生の後任として京都市立病院呼吸器内科部長を拝命いたしました。

私は2000年に京都大学医学部を卒業し、京都大学医学部附属病院、関西電力病院での内科研修を経て、田附興風会医学研究所北野病院 呼吸器内科に赴任致しました。同院にて呼吸器内科としての診療を学んだ後、2006年に京都大学大学院に入学、2010年に助教となってから13年間大学にて診療・研究・学生教育にたずさわってきました。臨床では喘息・慢性咳嗽を専門としています。

呼吸器内科は、肺炎、気胸などの急性期疾患から、喘息、COPD、睡眠時無呼吸症候群などの慢性疾患、近年では部位別死亡者数で一位となっている肺癌まで多様な疾患を扱う診療科です。また、当院は数少ない専門病床を持つ総合病院として結核診療も行っています。

これら疾患に対して呼吸器内科医として標準的な診療が

できることはもちろん必要ですが、その全ての最新の診療について個人が網羅することが難しいことも事実です。そのことが患者さんの、またコンサルトいただく先生方の不利益とならないよう、カンファレンスその他を通じて知識や症例の情報を科内で共有し、科全体としての診療を高いレベルで維持していきたいと考えています。

また、肺移植など当院では行うことができない特殊な治療や、近年単施設ではなかなか認められにくい臨床研究については、積極的に大学との連携を行ってまいります。

前任地とは感覚が異なることも多く、ご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

専門 喘息・慢性咳嗽

集中治療科部長 下新原 直子

令和4年7月1日より、小尾口邦彦先生の後任として京都市立病院集中治療科部長に就任いたしました。

私は、京都第一赤十字病院麻酔科で研修を終えたのち、京都府立医科大学麻酔科および集中治療科、長野県立こども病院小児集中治療科、市立大津市民病院救急診療科を経て、平成26年4月より京都市立病院ICUで集中治療医として診療を行っています。

京都市立病院ICUは8床で運用されており、入室患者の半数は予定手術の術後です。外科、泌尿器科、整形外科、脳神経外科などの侵襲度の高い手術の術後に加え、高齢者や合併症により全身状態悪化のリスクの高い患者が入室しています。一方、救急外来や病棟からは敗血症や心不全、心筋梗塞、脳梗塞などの重症疾患患者が入室しています。ICUにおいて積極的な初期治療を行うことで、ADLの低下を回避し早期退院を目指すとともに、緩和的なケアを必要とする

る患者さんにも対応しています。

ICUでは原因疾患の治療だけでなく、人工呼吸器や血液浄化装置などの生命維持装置の管理や適切な薬剤の管理、苦痛を取り除きながらの早期離床、適切な栄養管理など、多くの要素を取りこぼすことなく行っていかなければなりません。当院のICUでは各診療科の医師とともに集中治療科医師、看護師、薬剤師、臨床工学技士、理学療法士、管理栄養士、医療ソーシャルワーカーなど多部門多職種が協働して診療・ケアを行っています。

地域医療の携わる先生方に直接かかわる機会の少ない立場ではありますが、すべての診療科の重症患者に迅速に対応するとともに、早期回復し地域に帰っていくことを目指して急性期治療を担ってまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



専門 集中治療・麻酔

資格 集中治療専門医 麻酔科指導医 上級臨床倫理認定士

産婦人科部長 小芝 明美

本年4月1日より、藤原葉一郎先生の後任として京都市立病院産婦人科部長に就任いたしました。

私は、平成18年に京都府立医科大学を卒業し、京都府立与謝の海病院（現：京都府立医科大学付属北部医療センター）および京都府立医科大学病院で臨床研修を行ったのちに、京都府立医科大学産婦人科学教室に入局し、再び京都府立与謝の海病院で産婦人科診療の基礎を身につけた後に、京都府立医科大学大学院へ進学し、約10年間、子宮内膜症の診療と臨床研究を主に行ってまいりました。また、日本子宮鏡研究会へは会の発足当時から関わらせていただき、多くの先輩医師の指導を受けながら現在幹事長を務めており、子宮鏡手術を専門にしております。当院でも最新の子宮鏡機器を導入いたしましたので診療に役立ててまいります。

産婦人科という領域は、新生児から老年期まで女性の健康を生涯に渡ってサポートする診療科です。例えば子宮内膜症

は性生殖期女性の約10%が罹患するとされますが、手術療法をおこなっても5年後には約半数の患者さんが再発するといわれ、術後も適切な継続診療が必要です。また、現在または将来の妊娠希望の有無によって、治療方針や、いつ手術を実施するのが良いのか、高度生殖医療を含めた不妊治療をどのタイミングで開始するのか等、患者さんの「思い」に寄り添って診療計画を立てていく必要があります。これは産婦人科領域のどの疾患に対する診療に対しても同様であり、出産される患者さんの「思い」、がん患者さんの「思い」、不妊患者さんの「思い」と病院を訪れる全ての患者さんの気持ちに寄り添い、最善の医療を提供できるように尽力していきます。

今後とも変わらぬご指導、ご支援のほどよろしくお願いいたします。



専門 子宮内膜症、子宮鏡手術、女性ヘルスケア

資格 日本産科婦人科学会専門医・指導医、日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医（子宮鏡）、日本女性医学学会女性ヘルスケア専門医・指導医

精神神経科部長 石田 明史

令和5年4月1日より、宮澤泰輔先生の後任として京都市立病院精神神経科部長に就任いたしました。京都市立病院へは平成20年に赴任しコンサルテーション・リエゾンや外来業務を通して、幅広い疾患や課題に対する診療を続けてきました。地域の関連機関の皆様にはこれまでも日常的に無理なお願いをさせて頂いたり、貴重なご意見やご指導を頂くなど大変お世話になってまいりました。この場を借りてお礼申し上げます。

赴任当初は総合病院における精神医学的課題の多さと、これらに対する資源や体制の乏しさのギャップに日々もどかしさを感じておりましたが、それから15年が経ち精神科医療を取り巻く状況は大きく変わりました。時代精神や疾患概念の変化等にともない我が国における精神障害者数は約1.5倍となり、平成25年には五大疾病に精神疾患が組み込まれました。精神面に関する多くのテーマが一般身体科医療の中でも主題化されるようになり、総合病院においては器質性精神障害や

精神疾患患者の身体合併症治療という従来からの課題に加え緩和ケア、認知症ケア、妊産婦ハイリスク、自殺企図者支援あるいは意思決定支援や臨床倫理などといった課題への重点的なアプローチが必須化し、総合病院精神科に期待される役割も変わってまいりました。

当科では今後、より一層このような領域における活動を充実させていきたいと考えておりますが、これらの課題は地域の医療・福祉・行政各関連機関の皆様との緊密な連携なく取り組めることではありません。皆様の専門性と経験は当科の活動に不可欠な要素です。共に力を合わせて、この地域のケアの質の向上に向けて尽力していきたいと思っております。

皆様と協力し多くのことが達成できることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



麻酔科担当部長 白神 豪太郎

私は、昭和59年に京都大学を卒業し、京大病院、自治医大病院、京都市立病院等で臨床研修後、昭和62年京大大学院博士課程に進学(平成6年同修了、学位取得)、平成3年京大病院手術部助手(平成9～11年米国留学)、平成12年京大大学院医学研究科臨床病態生理学講師、平成14年京大病院デイ・サージャリー診療部／麻酔科助教授等を経て、平成20年香川大学医学部麻酔学講座教授に就任いたしました。香川大では附属病院集中治療部長、臨床工学部長、卒後臨床研修プログラム副責任者、副病院長、病院再開発推進室長、医療安全管理部長、手術部長等を兼任いたしました。本年3月、香川大定年退職・名誉教授号授与を機に、14年余の単身赴任生活を終え、本年3月16日付で、本院に麻酔科担当部長として着任させていただきました。

私は麻酔科医として、およそ40年間、勤務してまいりましたが、この間に世の中は激変しました。香川大在任中には、年々増大する麻酔科医需要＝麻酔科医不足に苦しめられました。36年ぶりの本院勤務では浦島太郎状態になっています。私は、この20年余、「麻酔の質」の向上、特に周術期鎮痛法の改善(オピオイド節減多様式鎮痛法や超音波ガイド下神経ブロック法の普及)に努力してまいりました。本院におきましても「医療の質」の向上(手術患者さんの安全確保、苦痛除去等)に微力を尽くしてまいりたいと存じます。皆様方には今後もより一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



専門 麻酔・周術期医学

資格 日本専門医機構麻酔科専門医、日本麻酔科学会指導医、日本集中治療医学会専門医、日本老年麻酔学会指導医、日本区域麻酔学会指導医、日本臨床麻酔学会教育インストラクター(神経ブロック)、臨床研修指導医

消化器外科担当部長 上 和 広

令和5年4月1日より、京都市立病院消化器外科担当部長に就任いたしました。

私は平成7年に京都大学を卒業、大学病院、滋賀県立総合病院、関西電力病院に勤務、平成13年に京都大学大学院に入学し平成17年より京都大学旧第一外科学医員として臨床に戻りました。大学院研究テーマが膵癌であったことから肝胆膵領域、特に膵癌診療を行う様になり、外科学講座臓器別再編成を機に平成18年に肝胆膵・移植外科学特任助教、平成20年に赤穂市民病院に勤務し、平成22年より京都市立病院に着任しました。京都市立病院ではや13年目となり、地域の皆様には大変お世話になってまいりました。

医学の進歩はめざましく、消化器癌手術で開腹がほとんどなくなり、腹腔鏡下手術がスタンダードになりました。昨今はロボット支援下手術が増え、昨年度は食道癌や肝癌を含め49例のロボット支援下手術を行いました。肝胆膵領域では昨年度は

肝切除術56例・膵切除術22例と安定した手術が行える様になりました。この様な先進的治療は私より若く優秀で献身的な外科医達が努力している結果です。私自身が手術や診療に従事することは勿論なのですが、様々な手術、診療そして人の間をまとめる役を果たしていければと考えております。

当院は、「市立病院」で市民の皆様の健康と命を守ることが責務であり、癌診療に限らず全般的に診療していく責務があります。私は「患者さんが納得する治療を選択できるまで、何度でも相談・説明する」ことを心がけて日常診療を行っております。今後もこれを心がけながら、市中病院で長く診療を行ってきた経験を生かし、地域の皆様のお役にたてる様に日常診療と病診連携を行って参ります。引き続きご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



エコーセンター部長(兼腫瘍内科担当部長、消化器内科担当部長) 宮川 昌巳

この度、令和5年4月1日付けでエコーセンター部長、消化器内科・腫瘍内科担当部長を拝命いたしました。

私は平成13年に京都府立医科大学を卒業後、消化器内科(当時の第3内科)へ入局し、大学病院、関連病院で消化器内科全般の診療に従事しました。平成25年4月に京都市立病院へ赴任し、肝疾患を中心に診療を行ってきましたが、肝炎ウイルスの治療法の進歩や、分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害薬などの新たながん治療薬の登場によって、消化器領域の疾患構造や治療戦略が大きく変化したため、現在は消化器がん全般のがん薬物療法や他領域の希少がんを含めたがんゲノム医療へ専門性を広げています。また最近では、同志社ビジネススクールで急性期病院の多職種連携におけるリーダーシップをテーマとしてMBAを取得し、医療現場での実践を目指しています。

超音波機器は消化器領域ではスクリーニング検査から、肝硬度測定、造影エコー、肝臓がんの局所療法など専門的な

診療に至るまで頻繁に使用されていますが、同様に、循環器内科、産婦人科、手術室、ERなど多くの診療科や部門において、専門性や用途に応じて幅広く利用されています。近年ではPOCUS(Point of care Ultrasound)と呼ばれる、ベッドサイドなどで超音波を短時間で、観察対象を絞って手軽に使用する手法も普及してきました。このような状況で、エコーセンターとして院内の超音波機器の使用環境を整えることは、病院全体の診療の質向上に寄与するものと考えています。教育の面では日本超音波医学会認定超音波専門医研修施設の指定を受け、超音波専門医や超音波検査士の育成に取り組んでいます。

超音波診療、消化器内科・腫瘍内科診療を出発点として地域の皆様に貢献できるよう励んでまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



専門 超音波診療、肝疾患、がん薬物療法、がんゲノム医療

資格 日本内科学会総合内科専門医、日本消化器病学会専門医(指導医・近畿支部評議員)、日本肝臓学会専門医(指導医・西部会評議員)、日本消化器内視鏡学会専門医(指導医)、日本消化管学会胃腸科認定医(専門医)、日本超音波医学会認定専門医(指導医)、日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、日本医師会認定産業医

はじめに

令和5年4月より感染症科部長を拝命いたしました栃谷と申します。私は平成25年に当院に医員として着任し、平成28-29年は大学院での研究のため離れておりましたが平成30年より復職いたしました。これまでも地域の皆様方にはお世話になってきましたが、今後一層関わりを持っていければと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

感染症科の紹介

京都市立病院感染症科は、明治15年に伝染病隔離病院として設置された「上京公立避病院」を前身としており、長年にわたり京都の感染症診療を担ってきました。近年は経済の発展も相まって、いわゆる伝染病患者は激減しましたが、2000年代には新型インフルエンザ、SARS、MERSなどの新興感染症、麻疹・風疹など以前は当たり前であった感染症の再流行、デング熱の国内アウトブレイクなど様々なイベントが起き、「感染症科」らしい生活をしておりました。

しかし令和2年1月に事態は一変します。新型コロナウイルス感染症の世界的な流行が起り、当院は京都府内で中心的な役割を果たすこととなりました。それからは、まさに「新型コロナウイルス感染症科」として、院内外で奮闘することとなり現在に至っております。

ただ、本年5月より新型コロナウイルス感染症も5類感染症に移行し、今後我々の診療もpreコロナを取り戻していくのではと考えています。この場を借りて当院の新型コロナ診療を振り返り、今後の当科の行先もお伝えできればと思います。

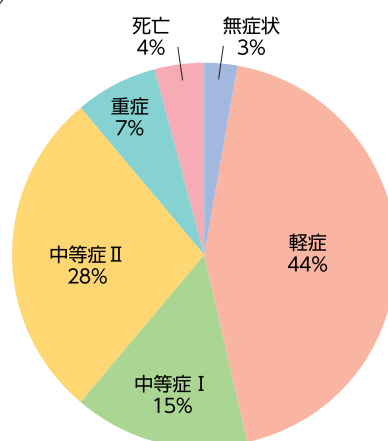
当院の新型コロナウイルス感染症

- 令和2年1月 京都府第1例目入院（軽症、その後無事退院）
4月 当院初の死亡例
7月 当院初回の院内クラスター発生
- 令和3年1月 第3波で重症患者が激増し、院内のネーザルハイフローが枯渇
10～11月 あまりの患者の少なさに、ワクチンのおかげでコロナ制圧できたんじゃないかと錯覚
12月 オミクロン株の猛威が始まり現実に戻る
- 令和4年 新型コロナ自体の重症者は減少したものの、新型コロナ契機の誤嚥性肺炎やADL低下高齢者で病床が埋まるそして現在に至る

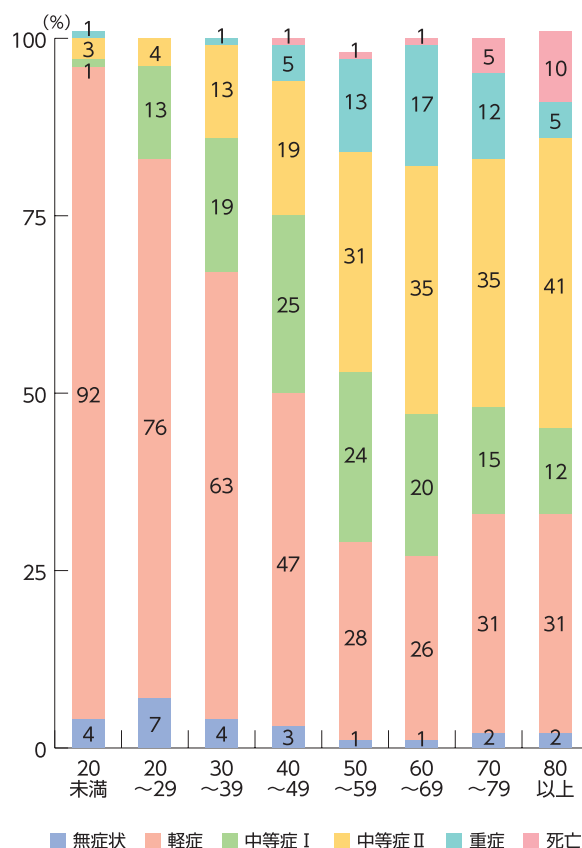


- 当院の入院患者数 1213名
（令和2年1月～令和5年5月18日までの集計で京都府内2番目の数です。）
（小児147名、妊婦28名含む）

- 重症度内訳（当院では中等症・重症患者を中心に受入してきました）



- 死亡者年齢別（年齢は重症化、死亡の大きなリスクであることが一目でわかると思います）



感染症科のこれから

体も心も舐まれた新型コロナウイルス感染症ですが、良かったのは感染対策に関する機運が高まったことだと思っています。どの医療機関も他人事ではなく、自分事として真剣に感染対策に取り組んでいただけるようになりました。今後この状態を維持し、将来に繋げていくために当院も地域での役割を果たしていければと思います。

診療に関しては、preコロナの雑多な感染症を取り扱う科に戻っていければと思っています。HIV感染症や麻疹・風疹、梅毒などの届出感染症、渡航前相談、渡航後の体調不良、原因不明の発熱・炎症反応高値などご相談ください。今後とも京都市立病院感染症科をよろしくお願いいたします。

最後にはなりますが、新型コロナウイルス感染症診療においては、当院は入院診療に注力するため、発熱外来を行わず、ワクチン接種も行わず地域の先生方には多大な協力をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

資 料

① 令和元年度感染症科入院患者の疾患内訳表

疾患	疾患数	%
感染症	212	90%
非感染症	23	10%
計	235	

② 感染症入院患者の菌血症の有無

菌血症の有無	疾患数	%
菌血症あり	50	21%
菌血症なし	185	79%
計	235	

③ 非感染症患者の内訳

非感染症	23
偽痛風	2
急性間質性肺炎	2
菊池病	1
心不全	1
結節性紅斑	1
高血圧緊急症	1
好酸球性筋膜炎	1
好酸球性肺炎	1
好酸球性腸炎	1
糖尿病性足病変	1
肺塞栓	1
反応性関節炎	1
老衰	1
腰椎圧迫骨折	1
関節リウマチ	1
SLE	1
脚気	1
原因不明	4

④ 感染臓器別疾患（主病名）の内訳

呼吸器	68
肺炎	28
新型コロナウイルス感染症	24
インフルエンザ	6
急性上気道炎	3
気管支炎	4
肺化膿症、膿胸	3
尿路	53
腎盂腎炎	47
複雑性尿路感染症	2
急性前立腺炎	3
気腫性膀胱炎	1
消化器	25
感染性腸炎	13
CD 感染症	2
肝炎	1
肝膿瘍	5
胆道感染症	2
憩室炎	1
肛門周囲膿瘍	1
心血管	16
感染性心内膜炎	12
感染性動脈瘤	1
感染源不明菌血症	3
皮膚・軟部組織	10
蜂窩織炎	9
带状疱疹	1
頭頸部	6
咽頭炎・扁桃炎	3
頸部リンパ節炎	1
Lemierre 症候群	1
菌性感染症	1
中枢神経	9
無菌性髄膜炎	6
細菌性髄膜炎	3
骨・関節	3
椎体椎間板炎	2
化膿性関節炎	1
生殖器・骨盤内	2
子宮留膿腫	1
骨盤内膿瘍	1
渡航関連	3
デング熱	3
その他	17
HIV/AIDS	4
肺外結核	3
伝染性単核球症	4
CMV 感染症	1
梅毒	1
パルボウイルス B19 感染症	1
裂頭条虫症	2
単純ヘルペスウイルス感染症	1



専門 内科一般・感染症診療

資格 日本内科学会総合内科専門医、日本感染症学会専門医（指導医）、インфекションコントロールドクター（ICD）、Certificate in Travel Medicine（CTH®）